

「ダディン郡まで里子に会いに行きました」

2012年3月

私が、フューチャーフラワー基金のことを知ったのは3年前、河北新報の記事でした。以前より、他団体で里子の支援をしていたのですが、フューチャーフラワー基金は、より里子との関係を大切にしていると感じ、迷わず申し込みました。

私の里子は、ビパナ・バッタちゃん。7歳の女の子です。マイディ村で、お母さんと弟と3人で暮らしています。

どのような支援に対してもいえることだと思いますが、自分の支援が、本当に役に立っているのか、だとすればどのように役立っているのか、ということは、誰しも気になることだと思います。「見返りなど気にせずに・・・」という言葉もよく耳にしますが、見返りというのではなく、自分の手から離れていった支援の種が、どこにたどり着き、どのような花を咲かせているのか、またはいないのか、私は非常に気になります。

とりあえず、倶楽部のメンバーが村を訪ねる際には、手紙を託していました。返事はあったり、なかったり。正直にいうと、少し物足りなく感じていました。

「支援は役立っているだろう。感謝されているに違いない」と思い込みつつも、実際のところはどうか、いつも気になっていました。そこで、今回は意を決し、ダディン群マイディ村までビパナちゃんに会いに行くことにしたのです。

ビパナちゃんに会うために、彼女へのお土産よりも何よりも、真っ先に準備したのは寝袋と懐中電灯。それを背負い、カトマンドゥウから車で6時間、マイディ村に向かいます。

マイディ村に着いた日の夜、ビパナちゃんが、お母さんと一緒に訪ねてきてくれました。

里親である私の手元には、里子の名前、生年月日、住所等が記載された写真付きのカードがあります。同じように、里子たちは、里親の写真入りのカードを持っています。ビパナちゃんは、私のところにやってくると、恥ずかしそうに、私の顔写真の入ったカードを私に差し出して見せてくれました。もちろん、言葉はまったく通じません。しかし、彼女と彼女の母親が言おうとしていることは、十分に伝わってきました。

村を訪ねてビパナちゃんに会い、支援をしているという実感が持てました。また、日本からお金や手紙を送っているだけの時にはあまり感じなかった「責任感」も強く感じました。現在、倶楽部の里子は70名を超えています。交流倶楽部は、非常に大きなものを抱えているのだと実感しました。村で子供たちに会い、この支援は何としても続けるべきだと思いましたし、他にできることがあるのなら、積極的にしたいと思いました。

ともあれ、私の里子、ビパナ・バッタちゃんは、想像通りとってもかわいいお嬢さんでした。彼女が、私が訪ねていくのを心待ちにしてくれていたことが分かったこと、持って行ったお土産を手にとっても嬉しそうな顔をしてくれたこと、これだけで、私は大満足です。

